

宮崎県（宮崎市・延岡市・日向市）の現地調査概要

- ・九州東部の日向灘では津波活動が極めて活発であり、沿岸部は日向灘地震（海溝型地震）による巨大津波に幾度も襲われている。
- ・文献調査に基づき、過去の記録が残る地域において詳細情報を収集するため、宮崎県宮崎市、延岡市、日向市で現地調査を実施した。

調査日：平成 25 年 12 月 10 日（火）～11 日（水）

調査地点：宮崎県宮崎市、延岡市、日向市



▲調査箇所図

出典：国土地理院

【外所^{とんどころ}地震の概要】

- ・宮崎県宮崎市は、江戸時代まで大名が直接統治せず、城下町が形成されなかった。このため、古い文献が少なく、災害の履歴を遡ることが困難な状況にある。
- ・宮崎市内で確かな記録として残されている大規模な地震と津波に、寛文 2 年（1662 年）10 月 31 日に発生した「外所（とんどころ）地震」がある。
- ・外所地震は、有史以来最大級の日向灘地震である。震源は日向灘沖の北緯 31.6 度、東経 132 度、マグニチュードは 7.6（7.5～7.8 とも言われている）。
- ・宮崎県内の大部分で震度 5 以上の揺れがあり、高さ 4～5m ほどの津波が宮崎県から鹿児島県大隅半島一帯に來襲したと推定される。

- ・特に飢肥藩（現在の宮崎市大字熊野周辺）を中心に被害が大きく、延岡、高鍋、佐土原、飢肥の諸城で石垣が崩れ落ち、3,800の家屋が倒壊。200人が死亡したと飢肥藩の記録にある。
- ・平部嶺南（飢肥藩家老：1815-1890）は、自身の著書『日向地誌』の中で、「寛文二年九月十九日の夜子の刻、日向国地大いに震し、且つ津波俄かに来りて那珂郡の内下加江田本郷所々の地陥って海となること周囲7里35町、田畑8500石余、米粟2350石余流失あり。潰家1213戸の内、陥って海に入るもの246戸、其人員2398口の内、溺死15人、牛馬5頭に及べり。飢肥の城にも石垣9ヶ所192間破壊し、城隍2ヶ所埋り、外緒土屋敷土蔵石垣等の破損勝て数ふるに違あらず。誠に未曾有の大災なり（原文片仮名）」と記している（木花郷土誌編集委員会）
- ・倒壊した家屋1,213戸（うち海没した家屋246戸）、水死者15人、那珂郡7村の周囲7里35町（約32km）の水田が浸水、8,000余石の米が水浸しになったとされる。
- ・また、『日向纂記』の記述に「那珂郡ノ内下加江田本郷所々ノ地〔故老ノ話ニ青島並東ニ出シ村七ツ殿所ナト云ヘル所アリシカトモ寛文ノ地震ニ陥テ海ト成レリト（中略）所謂七ツ殿所村ハ下加江田及ヒ本郷ノ内ニアル小区ノ名ナルヘシ〕陥テ海トナルコト周囲七里三十五町」とある。
- ・これらの記述に基づくと、大淀川河口の下別府村、福島村および加江田川河口の外所（殿所）村で1mほど地盤が陥没。そこへ地震に伴う津波により海水が流れ込み、青島と並んで南にあったという外所村は海に沈んだ。外所という地震の名称は海没した村の名前に因むものである。
- ・外所地震発生後、入り江は洪水のたびに土砂で埋まり、次第に泥沼となっていった。
- ・地域の人々は、享保年間(1716～1735)に、島として残っていた島山を基点にして、長さ8町(約872m)の正連寺内堤を築いた。
- ・文政年間(1818～1829)には、長さ15町(約1636m)の正連寺外堤を築き、内海を埋め立てた。この堤によって、地震で失われた田が取り戻された。（木花郷土誌編集委員会）



▲正連寺外堤から埋立地を望む

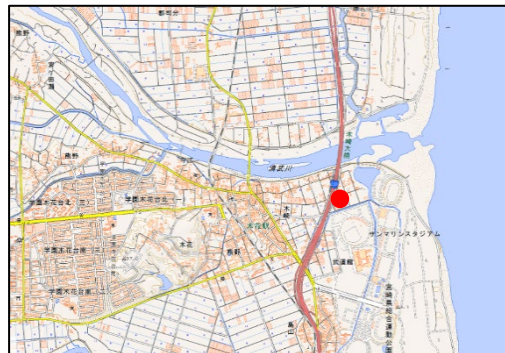


▲池が多く残る（奥に見えるのは木の花ドーム）

とんどころ

【外所 地震被害者の供養碑を 50 年おきに建設：宮崎市熊野字島山】

- ・宮崎市熊野字島山に現存する 7 基の供養碑は、外所地震・津波の被害を後世に語り伝え、防災上の戒めとするため、庄屋が 50 年ごと（1 世代）に 1 基ずつ建築してきた。
- ・左端の石碑が最も新しく平成 19 年（2007 年）に建てられた 350 年忌の碑である。
- ・右に向かって年代を遡り、宝暦 11 年（1761 年）・文化 7 年（1810 年）の年代が刻まれた石碑もあるが、摩耗して碑文は読み取れない。
- ・昭和 32 年（1957 年）の 300 年忌には宮崎市が建立し、平成 19 年の 350 年忌では地元の木花地区住民の出資により建てられている。
- ・島山地区の自治会長 岩切氏の談話では、この供養碑を防災活動の教訓にしているという。これらの供養碑はまさに“災害文化の伝承”に相当すると言える。



▲外所地震の供養碑位置（宮崎市熊野字島山）



▲供養碑（右から 50 年忌～350 年忌）



▲最新の供養碑（H19 年の 350 年忌に建設）



▲供養碑（左から昭和 32 年建設の 300 年忌～50 年忌）



▲供養碑は国道 220 号と 338 号の交差道路に面して建つ（一番手前が島山地区の自治会長 岩切氏）

外所大地震歴代供養碑

地震発生 年月日・時間

※ 寛文二年(一六六二)旧九月十九日子の刻 震源地 青島の北東の位置
 (王) 寅時 (大地震ニテ外所入海トナル故 今ノ御二移也) (西教寺系図)

第一基 五十回忌 石片に「辛巳」の刻字。元禄十四年(辛巳)(一七〇二)に該当。この年は地震発生から三十九年目に当たり、五十回忌法要は不自然。依つて第一基は不明。

第二基 百回忌 年号不明 消除三垢冥・廣濟衆厄難く等の刻字有り 九九年目
 辛巳の年は宝暦十一年(辛巳)(一七六一)にも該当する。大経(重鑑)偈
 依つて、地震発生百回忌に第一基の供養碑を建立したのでは、とも思われる。

第三基 百五十回忌 文化七年六月二十四日(庚午年)(一八一〇) 一四八年目
 十方恒沙仏 廣開浄土門 善導著 観経・観経玄義分(帰三宝偈)

第四基 二〇〇回忌 安政六己未年 (一八五九) 一九七年目
 天下和順 日月清明 風雨以時 災厲不起 国富民安 兵戈無用 (大経)
 「天明五」 安政六己未九月二六再建之(一八五九) 正右卫門

第五基 二五〇回忌 明治四十一年 (一九〇八) 二四六年目
 若人持戒 多諸天増 足威光 修羅減少 惡龍無力 善龍有力 風雨順時
 四氣和暢 甘雨降 稔穀豊 人民安楽 兵戈戢息 疾病不行也

第六基 三〇〇回忌 昭和三十二年九月一九日(丁酉年)(一九五七) 二九五年目
 宮崎市長 有馬美利の名とメッセージ

第七基 三五〇回忌 平成十九年九月一五日(丁亥年)(二〇〇七) 三四五年目
 木花振興会と西教寺 我々自然界に存在するものは、決して大自然と共に生きることを忘れることなく、それに対して大なる畏敬の念を持ち防災の大切さを後世に伝えることにある。)

前面墓石…西教寺初代住職 釈 道源法師之墓 正保六月二十四日 七十六歳寂



※外所大地震(M七、六)旧暦寛文二年九月十九日
 (新暦一六六二年十月三十日)子の刻

日向灘沖で地震・津波が発生。

震源地 北緯三一、七度 東経一三二度

青島より北東の位置

※宝永地震(M八、四)一七〇七年十月二十八日(旧暦宝永四年十月四日)死者二万人・倒壊六万戸。
 土佐を中心に我が国最大級の地震そして大津波が発生。当然日向灘も襲つた。

島山自主防災主催の供養及び防災講座

・藤本 廣 宮大名善教授の講演

平成十七年九月十三日実施

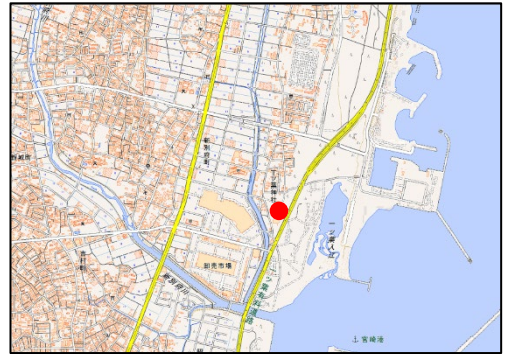
文久二年四月八日(壬戌年)(一八六二)

大正十四年二月(乙丑年)(一九二五)二六三年目

日美護阿弥陀跡波條塔

とんどころ
【外所 地震の伝承：宮崎市新別府町前浜 一葉稲荷神社】

- ・宮崎市新別府町の一葉稲荷神社の本殿に、外所地震の伝承「木彫りの白兎」がある。
- ・神社の由緒書きによれば「寛文二年（1662年）西海大地震の時、この地に大津波が押し寄せました。その時、突如白ウサギが現れ波を跳ねのけて、この地を災害よりもったという伝説があります。御本殿の裏側には貴重な彫物としてその白ウサギが今も残されております。」とある。
- ・古来より白い動物は、災害が起こる前触れのシンボリックなものとして扱われてきた。因幡の白ウサギ伝説は災害伝承という説もある。
- ・一葉稲荷神社の「木彫りの白兎」は現代に外所地震の被害を伝える貴重な史料である。



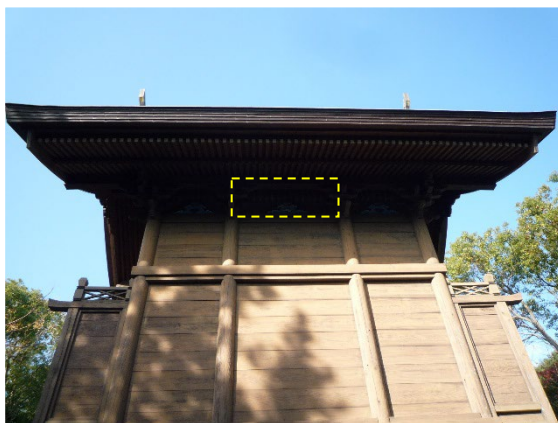
▲一葉稲荷神社位置（宮崎市新別府町前浜）



▲一葉稲荷神社の本殿



▲開運の白兎の由来



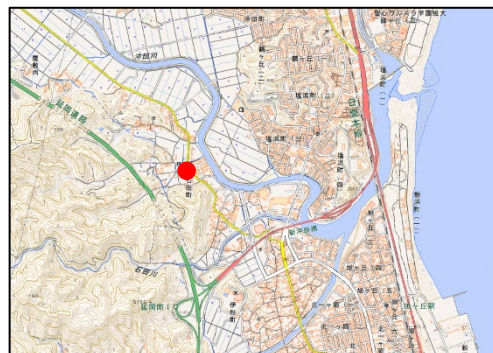
▲一葉稲荷神社の本殿裏に木彫りがある
（点線部）



▲外所地震の伝承「木彫りの白兎」

【花笠踊りの由来になった津波：延岡市^{いがた}伊形町】

- ・延岡市伊形町の日枝神社に伝わる宮崎県の無形民俗文化財「伊形花笠踊り」は、天正 13 年（1585 年）10 月 15 日もしくは慶長 9 年（1604 年）12 月 16 日の地震に伴う津波被害を伝承するものである。
- ・「伊形花笠踊り」は風流系の踊りであり、かつては海の大潮にあわせて旧暦の 8 月 16 日～17 日に開催されていたが、現在は新暦に行われている。
- ・伊形村の古い伝説に基づいて、農村、農耕の無事を龍神に祈る格調高い 2 日間にわたる「龍神祭」である（延岡市民俗芸能調査報告書）。
- ・伝承では、高潮退潮奇岩とそれに対する感謝、旱魃への雨乞い、そして津波鎮静祈願とそれに対する感謝の 3 つが伝えられている。
- ・約 400 年前からの伝承とされるが明らかではない。
- ・この踊りが伝承されている伊形・石田地区は沖田川から日向灘に注ぐ低湿地の水田地域であり、3 つの伝承に関する災害が実際に発生した可能性は極めて高い。
- ・延岡市の内藤家に伝わる内藤家文書には、安政元年（1854 年）の安政の大地震の際に、当時の伊福形村で 2 尺ほど水位が上昇し、液状化現象などにより塩浜が破壊したという記録がある。
- ・津波伝承には「400 年ほど前、伊形地区は大きな津波に襲われた。津波は 7 日 7 晩続き、山に避難した村人達が神仏に救いを求め、熱心に祈ったところ、どこからともなく神の使いである 7 羽の白鷺が現れ、沖合の波頭の上で舞い始めた。すると、不思議なことに津波は瞬間に治まった。村人達は神仏の助けと喜び、以来、踊りが奉納されるようになった」という一説がある。これは宮崎市一葉稻荷神社の「白兔が波頭を飛び跳ねると津波が神社を避けた」という外所地震の伝承との類似性を伺わせる。



▲延岡市伊形町日枝神社の位置

- ・「伊形花笠踊り」の津波鎮静祈願は次の 3 番踊り。

＜歌詞＞

浜の真砂に磯うつ波は、
さらーりさらーり、さ
ら、さら、さーらと、
引いたところは、の
ーもおー、うれしや(伊
形花笠踊り保存会)



▲伊形花笠踊り（画像提供：九州保健福祉大学 山内 利秋 准教授）

【宝永・安政大地震の発生後、津波が河川を遡上：延岡市】

- ・宝永地震（宝永4年・1707年）が発生した当時の藩主・三浦明敬が残した三浦家文書「日録」によれば、「未時後、東海大波入、河川濁逆流」と、地震発生から1時間経つかどうかのタイミングで東海へと津波が押し寄せ、その津波が河川を逆流したことが確認できる。
- ・この時の津波の高さは、水かさの多い大潮の際と比べても「四五尺水高」として、120～150cm程度の上昇があったことを示している。

【図1】宝永地震における延岡地域の被害状況



出典：延岡市文化課文化財係

- ・安政地震（安政元年・1854年）が発生した当時の内藤家文書「万覚書」によれば、「沖合至汐高く、昨夕度々差引有之、汐色常舛無之」という海の状態から、「最寄地高之場所」へと非難したことが伺える。
- ・楠津・土々呂地区では、通常より約270cmの水位上昇が報告され、地震発生直後から津波が押し寄せ、翌日の昼までに16回も津波が確認されるなど具体的な津波の状況を知ることができる。
- ・また、内陸部の北川村の五ヶ瀬川筋で約90cmの増水が確認されており、宝永地震と同様に、津波が大きく川を遡っていたことを確認することができる。

【図2】安政地震における延岡地域の被害状況



出典：延岡市文化課文化財係

【津波の高さを示す細島道路元票：日向市】

- ・宮崎県日向市は、江戸時代に天領であったこともあり、公開されている文献が少ない。
- ・そのようななか、日向市細島地区のコミュニティセンター横に建つ「細島道路元票」が津波の高さを記録している。
- ・現在の道路元標台座の高さは、安政元年（1854）11月5日に日向地方を襲った大津波の高さに合せて作られていた元細島港役場の土台（石垣）の高さと合わせてつくられている。
- ・細島を襲った津波の高さは約1.8mあったとされる。



▲日向市細島コミュニティセンターの位置



▲細島コミュニティセンターと道路元票



▲海拔約2.6mとの標示



▲道路元票の全景



▲土台の高さまで津波が押し寄せた

【宮崎市内での地震津波対策：宮崎市】

- ・宮崎県宮崎市の防災対策は、これまで台風・豪雨災害に重きが置かれていたが、東日本大震災以降、日向灘に面しているという地理的条件から、危機感を持って地震津波対策に取り組んでいる。
- ・地震・津波の発生時に周辺住民も避難できるよう、平成24年度に沿岸部の小学校5校と中学校2校の屋上に通じる避難階段を整備した。
- ・また標高の低い地域には、避難に役立つよう標高表示板を整備している。



▲宮崎市立赤江小学校の避難階段



▲宮崎市内の標高表示板



▲宮崎市内の標高表示板



▲宮崎市内の標高表示板

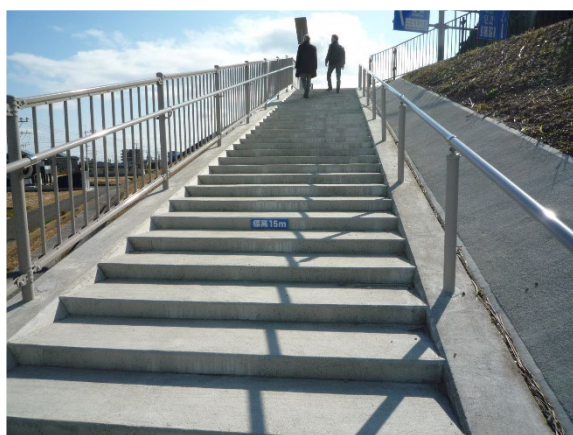
- ・東日本大震災時には、国道 220 号青島バイパスのパーキングに、多数の住民が避難した。
- ・この事態を受け、国道 220 号や宮崎県道路公社管理の道路のうち、盛土構造部などの津波避難に有効な箇所において、道路管理者が避難階段の整備を進めている。



▲直轄国道 220 号（青島地区）の避難階段位置
出典：国土交通省宮崎河川国道事務所 HP



▲直轄国道 220 号（青島地区）の避難階段①



▲避難階段は高齢者対策で段差が低い



▲直轄国道 220 号（青島地区）の避難階段②



▲直轄国道 220 号（青島地区）の避難階段③



▲避難階段の誘導板（青島海岸）